

事例 12 園と小学校が連携して切れ目ない支援を考える

園は小学校教育を見通した教育を行っており、小学校では、特に入学当初では、幼児期に近い活動と児童期の学び方を織り交ぜた教育に配慮しています。例えば、入学当初は、園での掲示方法を取り入れて教室の掲示をしたり、弾力的な時間割を設定したり、幼児期に親しんできた遊びを取り入れたりなどして、児童が安心して小学校生活を送れるような基盤が大切です。その上で、障害のある幼児などが小学校に安心して通うことができるようにするためには、どのようなことに配慮したらよいでしょうか。

【ポイント】

- 小学校における支援の検討の参考になるよう、保護者の承諾を得た上で、困難さや困難さに応じた園での支援について具体的に伝えましょう。
- ・ 幼児の障害の程度や状況、支援策、園での生活の様子や他の幼児との関わりなどについて具体例も交えながら話しましょう。
- ・ 現在の当該幼児の実態だけではなく、例えば、4月からの当該幼児の成長や支援策の見直しなどについて話しましょう。
- ・ 小学校の先生が、当該幼児の園での生活の様子を参観する機会を設けましょう。

ダウン症のあるM児に関する小学校への引継ぎ

ダウン症のあるM児は、人懐こく、大人と積極的に関わりをもとうとします。笑顔で関わっていくことが多いため、保護者や周りの人から愛されています。安心して楽しく、M児らしく伸び伸びと小学校生活を送ってほしいと担任は思っています。そのためには、M児の実態に応じた支援の継続性が大切です。個別の教育支援計画や自治体等で取り組んでいる就学支援シートなど、障害のある幼児などの実態や支援について記載されている資料を活用するとよいでしょう。しかし、継続的な支援を実効性のあるものとするためには、それだけでは十分とは言えません。当該幼児などがどのようなことに困っているのか、先生はどのような意図の下に支援をしているのか、当該幼児の成長等に伴う支援の見直しなどについて、園で生活する具体的な様子とともに説明し、小学校の先生が具体的にイメージできるように努めましょう。

【小学校に伝えた内容】

①障害のある幼児などを取り巻く状況

ダウン症があり、言語の遅れ、知的な遅れ、低身長などが見られる。3歳から療育機関と連携して通所している。園には4歳で入園した。

②障害のある幼児などの特性や特徴

- ・人と関わることが好きで、皆と同じ場で過ごすことができるが、活動への参加は支援を要する。
- ・音楽が好きで、リズムに乗って体を動かすことを好み、皆をまねて一緒に走ったり、追いかけ鬼に参加したりする。手先の力は弱く鉄棒などをつかむ、ボールを投げるなどの動きは難しい。
- ・自分の思いは表情や態度で表すことがほとんどで、「いや」「だめ」と拒否するときは言葉で言い、手で払いのけたりふくれ顔をしたりして示す。M児なりに気持ちを切り替えようとしても、こだわりが強くなり切り替えられなくなる傾向がある。
- ・周りからの刺激を受けやすく、自分でできることをしなかったり、食事に時間を要したりする。

③障害のある幼児などの成長の様子

○体の動きについて

【M児の姿】

- ・4歳の入園時は階段の上り下りを自分でしようとせず、抱っこを要求することが多かった。2年間の生活で階段や段差等の足取りがしっかりしてきた。
- ・三輪車に乗ったり、音楽に合わせて体を動かしたり、粗大運動の機会をもつようにしてきたことで、体のふらつきが少なくなってきた。
- ・指先の細かな動きを伴うペンでかくことや箸を使って食べることは難しく、大きな画用紙にかいたり、スプーンやフォークなどで食べたりしている。

【配慮していること】

- ・発達がゆっくりなため、日常生活で体を動かし、粗大運動を積み重ねていくことで、体の動きやバランスがよくなってきた。
- ・指先を使うことは個別に支援し、皆と同じようにできたという気持ちをもてるようにしている。

○活動への参加について

【M児の姿】

- ・興味をもったことを途中で終わりにすることができにくく、保育室に戻れなかったり物を片付けられなかったりしていたが、クラスの皆が集まることを伝えたり、次のことへの見通しをもてるようにすると、気持ちを切り替えてクラスに戻るようになってきた。
- ・協同製作などは、個別対応でガムテープを切って渡して貼るようにしたり絵具で塗る部分を示したりするなど、皆の中でM児ができることで参加し、一緒に活動することを楽しんできている。
- ・乗り物ごっこ活動では、M児が乗り物に乗るだけでなく、先生に促されると年長の仲間として乗り物を押す役割を行えるようになってきた。

【配慮していること】

- ・クラスへ参加の意識が育ってきているので、皆と一緒に活動する中でM児のできることで参加したり、できる役割を担ったりして満足感が得られるようにした。

○自己表出・気持ちの切り替え

【M児の姿】

- ・「だめ」、「いや」の拒否する言葉以外は、表情と態度で表していたが、名前を呼ばれたら返事をしたり挨拶の言葉を言ったりするなど、少しずつ発語や語彙が増え、思いを伝えようとするようになってきた。
- ・自分の思いどおりにならないときは、先生の誘いを拒んだり物から離れようとしなかったりしていたが、先生がM児の気持ちを言葉で表して受け止めたり、M児の気持ちを満たす対応をしたりすることで、気持ちを切り替えることができるようになってきた。

【配慮していること】

- ・自分の思いを伝えようとする行為が増えてきているが、まだ言い表せない言葉も多いので、先生が気持ちなどを代弁して、M児の語彙が増えるようにした。
- ・気持ちの切り替えがしやすいように、「まだ遊んでいたいね。でも、お弁当を食べる時間だから片付けようね。お弁当を食べたらまた遊ぼうね」といったように、先生がM児の気持ちを受け止めていることを伝えるなどした。

○身の回りの生活習慣

【M児の姿】

- ・排泄^{せつ}が自立し、自分からトイレに行くことができるようになった。
- ・基本的な身の回りのことは自分でできるようになったが、気が散ると進まなかったり気が乗らないとやろうとしなかったりする。

【配慮していること】

- ・M児のペースを保証すると自分なりにやろうとすることやできることが増えてきた。しかし、周りの動きや音に影響されて気持ちが向かなくなると、できることもやろうとしなかったり、時間を要したりする傾向がある。物の位置や座る場所を配慮して、しようとすることに集中できるようにした。

○他の幼児との関わり

【M児の姿】

- ・人と関わるのが好きで、皆をまねて一緒に走ったり、追いかけて鬼に参加したりする。
- ・自分の気持ちをうまく言葉で表現できないために他の幼児に思いが伝わらなかったり、強いこだわりが生じて他の幼児といざこざが生じたりすることがある。
- ・M児はH児と一緒にだと落ち着いて活動に参加できる傾向にある。H児は、M児の思いを確認しながら活動に誘ったり手伝ったりしている様子が多く見られるので、M児も安心なのだろう。

【配慮していること】

- ・M児の気持ちを代弁して他の幼児に伝えるなどして、幼児同士と一緒に遊びを楽しめるようにしている。

④保育参観などを通して

「③障害のある幼児などの成長の様子」において伝えたことを、実際のM児の生活する姿から具体的に伝えていきます。紙や口頭での説明だけでは、先生の口調や周囲の雰囲気、そういった環境の中でのM児の表情や言動は伝わりません。また、掲示物や集まる場所の目印といった生活環境への配慮についても、実際に見た方がよく分かります。さらに、M児が他の幼児と遊ぶ様子から、興味のあることや好きな遊びの傾

向、遊びを楽しんでいる様子や困難さを感じたときのM児の様子なども知ることができます。

保育参観を通した話し合いの様子

M児は園庭で三輪車に乗って遊んでいる。片付けてクラスに集まる時間になるが、M児は遊びをやめることができない。先生がア「Mちゃん、片付けて保育室に戻ります」と声を掛けると、「いや」と言って三輪車を放そうとしない。再度イ「Mちゃん、片付けて保育室に戻りますよ。集まったら桃太郎の劇をするから」と声を掛けても、「いや」と言って口をとがらせて怒る。そこで先生は、ウ「そうか、まだ遊んでいたいよね。あと1周ぐるっとしたら終わりにしようね」と言い、三輪車置き場で待つことにした。その間「Mちゃん、速い」と声を掛ける。

エ 三輪車置き場の手前に誘導して、一緒に片付ける。「Mちゃん、片付けるの上手」と言うと笑顔で保育室に向かう。オ 自分で靴を履き替えて保育室に戻ることができた。

保育参観後の話し合いでは、保育参観中に見られたM児の姿と先生の声掛けなどの支援（ア～オ）について、支援の意図を小学校の先生に伝えた。

ア 全体指示だけでは意識しにくいので、今することを、個別に、かつ簡潔に伝えるようにしている。

イ 次にすることを知らせて見通しをもてるようにしている。

ウ 片付けることだけを知らせていくと、片付けたくない気持ちが募り頑固になっていく傾向がある。そこで、「いや」という返答や怒って拒否する態度を、もっと遊びたい気持ちの表れと受け止め、1周乗ったら終わりにすることを提案することでM児が納得するようにしている。

エ 一緒に片付けることで、M児の気持ちがそれないようにしている。

オ 自分でできる身の回りのことは、自分で行う姿を見守っている。

園での対応の仕方を具体的に知らせることは、小学校でのM児の支援につながることで期待されます。また、単に伝えるだけではなく、小学校の先生との意見交換の機会をしっかりと設けるようにしましょう。

事例から読み取れること

小学校への引継ぎに当たっては、保護者の承諾を得た上で、なるべく具体的に伝えていきます。障害のある幼児などにとって、生活の場が園から小学校に変わることは大きな変化です。その変化に戸惑い、不安を感じ、園ではできることも一時的にできなくなったり、落ち着きがなくなったりするかもしれません。そうしたときに、園で慣れ親しんだ遊びがある、集合場所の目印や掲示物といった生活空間があるといったことは、当該幼児にとって安心できることでしょう。また、先生の指示などについても、個別に簡潔に伝えてもらっていたのが、急に他の児童と一緒に全体の指示になってしまっただけは、理解できないばかりか、不安もつのってしまうことでしょう。

当該幼児の実態に応じた支援が小学校に引き継がれ、安心して小学校での生活ができるようにするためには、小学校の先生が、小学校での学習や生活の支援をイメージできることが大切です。

なお、小学校での新しい生活に不安を感じているのは、当該幼児だけではなくありません。保護者も、「園でこれまでやってきた支援は引き継がれるのか。我が子の生活の様子を知らない保護者もいるが、小学校ではそういったことにも配慮してくれるのか」といったことを心配するかもしれません。保護者の承諾を得た上で、小学校に、これまでの保護者の思いや要望、園とどのようなやり取りをしてきたのかなどについて伝えましょう。そして、保護者の不安が軽減され、当該幼児だけでなく保護者自身も小学校生活に期待がもてるように支援をします。

障害のある幼児などはゆっくりと新しい生活に慣れていきます。そうした様子を温かな様子で見守り、継続的な支援をしていきましょう。そのためには、家庭や関係機関とも連携した一貫した支援が必要であることも忘れてはなりません。

(第5章7. 小学校への円滑な接続 155 頁参照)